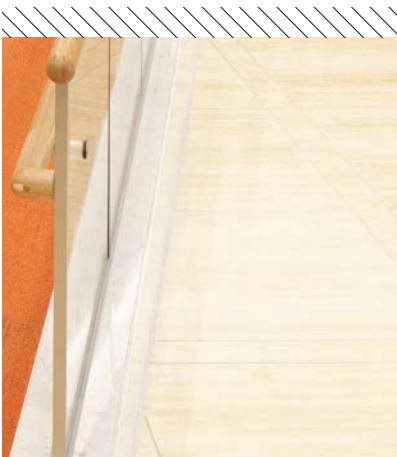




TOP MUSEUM



TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM



GRAND REOPENING SEPTEMBER 2016

東京都写真美術館ニュース
eyes87号 LINE UP

9月3日(土)リニューアル・オープン!

展覧会スケジュール
(2016年9月-2017年3月)

「杉本博司 ロスト・ヒューマン」展
インタビュー

教育普及プログラム2016

支援会員のご紹介

TOPMUSEUM.JP



eyes TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM
NEWS MAGAZINE / 2016 Vol.87

東京都写真美術館 2016年9月3日、いよいよリニューアル・オープン。

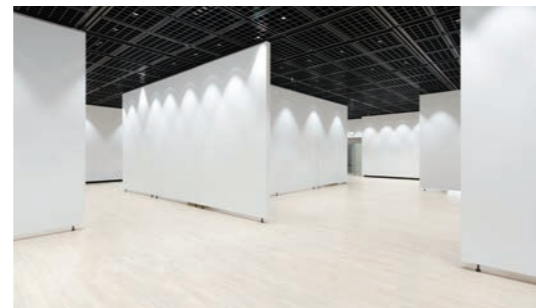
東京都写真美術館は、
総合開館20周年を迎えました。

東京都写真美術館は、1990(平成2)年の一次施設開館、1995(平成7)年の総合開館、そして約2年の改修工事を経て、2016(平成28)年に「総合開館20周年」を迎えました。国内初の写真・映像の総合美術館として、これまで460を超える展覧会の開催や、33,000点以上の作品収集をはじめ、教育普及事業、図書室運営、保存科学研究など、多角的な美術館活動を展開してまいりました。20年以上にわたる多くの皆さまのご支援・ご理解に、心より感謝申し上げます。2016(平成28)年度は、すべての活動を「総合開館20周年記念」と題して、9月3日より「杉本博司 ロスト・ヒューマン」展を皮切りに、さまざまな展覧会や関連イベントを開催いたします。いよいよリニューアル・オープンを迎える東京都写真美術館にどうぞご期待ください。

「トップが集まる、トップに出会う。新しくなったトップミュージアムをご紹介します。」

展示室

2階、3階展示室は従来のカーペットから木の床材に変更し、新しくホワイトキューブの展示室に生まれ変わりました。地下1階展示室は可動壁サイズを拡大し、写真や映像、パフォーマンス・アーツなど幅広いプログラムに対応できる空間になりました。



3F展示室



B1F展示室

エレベーターの増設

来館者用エレベーターを従前の1機から2機に増設いたしました。スムーズに各階展示室にご案内いたします。

エントランスホール

1階エントランスホールは光のデザインを多用した、明るく開放的な空間に生まれ変わりました。ホスピタリティの高いご案内ができるよう、総合受付機能を充実させていきます。2階エントランスは、国内外の多様な文化圏から集まるお客様の交流にふさわしい共有スペースとして、質の高い映像・音響機器を導入しました。

環境と作品に優しい、照明機器と空調設備

展示室及び館内の照明機器にLED照明を採用するなど、環境負荷の低減にも配慮しました。また、作品保護にもすぐれた美術品専用の照明機器を使用しています。さらに空調設備も経年劣化に伴う改修を実施。都民の貴重な財産である写真・映像作品をさらに安全に管理いたします。

ミュージアム・ショップとカフェ

美術館でゆっくりとした時間が過ごせるように、ミュージアム・ショップを2階エントランス付近に、カフェを1階ロビー西側に、それぞれ新装オープンします。ショップは専門書籍やオリジナルグッズに定評のあるナディッフ(株式会社ニューアートディフュージョン)が出店。カフェは天然酵母パンや自家製スープが人気のMaison ICHI(株式会社メゾン・イチ)が美術館初出店します。



新しいシンボルマークが誕生。
愛称は「トップミュージアム」

総合開館20周年のリニューアル・オープンにあわせて、新しいシンボルマークとロゴタイプを制作しました。英語館名「Tokyo Photographic Art Museum」の頭文字の一部から「トップミュージアム」の愛称を決定しました。写真・映像の専門美術館として、いつもトップの感動をお届けしたいというスタッフ全員の思いでもあります。どうぞ気軽に「トップ」と呼んでください。

シンボルマーク

TOP MUSEUM

「光」でうつし出すシンボルマーク

シンボルマークは、写真と映像を生み出す「光」によって、「TOP」の文字をうつし出したデザインで構成しました。「TOP」は、ドアをひらくようにも見え、感動に出会う期待感、奥行きや空間性を表しています。新しい表現の扉をひらき、お客様をお迎えする決意をイメージしています。

ホームページとツイッターが
新しくなりました。

2016年4月に公式ホームページとツイッターが新しくなりました。さまざまな端末で読みやすく、作品が映えるデザインを採用。展覧会やイベントのお知らせなど、美術館の最新情報をお届けします。

- 公式ホームページ topmuseum.jp(日・英)
※中国語(簡体字)・韓国語は8月開始予定
- 公式ツイッター @topmuseum

美術館ニュース『eyes』、
別冊『nya-eyes』も発行

トップミュージアムの広報誌は、『eyes』(本誌、季刊)と別冊『nya-eyes』(月刊)の2種類。『eyes』は展覧会と上映作品を紹介し、『nya-eyes』は漫画家・カレー沢薫さんが、美術館の仕事に奮闘する猫の主人公と学芸員の姿を楽しく描きます。

教育普及プログラム2016 リニューアル・オープンに先がけて始動!

トップミュージアムの教育普及では、写真、映像、美術に親しみ、作品をより深く理解するきっかけとなるようなプログラムを行っています。子供から大人まで、また初心者から上級者まで幅広い層を対象に、制作体験や、対話をしながらの作品鑑賞など、さまざまな切り口のプログラムをご用意しています。



ワークショップ/体験型プログラム

子供から大人まで広く一般の方を対象に、写真・映像を体験する・学ぶためのワークショップや体験型プログラムを用意しています。

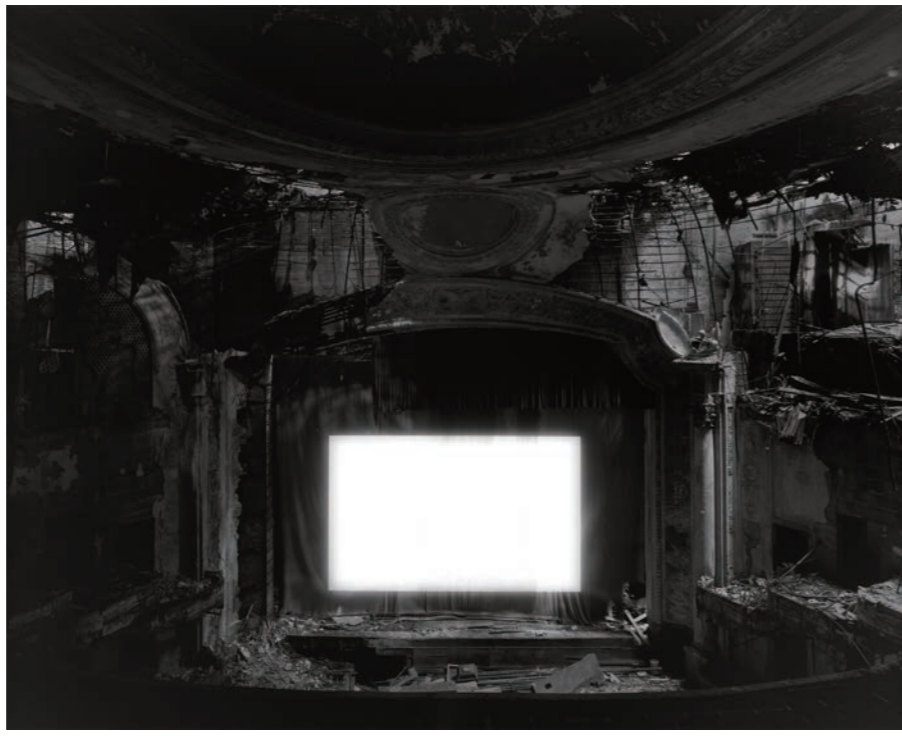
スクールプログラム

小・中・高等学校などの授業やクラブ活動での来館を対象に、スクールプログラムを実施しています。制作と鑑賞の両面から、写真・映像の仕組みと楽しさを体験的に理解できる豊富なプログラムを用意しています。

《スクールプログラムの基本メニュー》青写真『太陽の光で影を写しとる』/手作りアニメーション体験『おどろき盤』/手作りアニメーション体験『コマ撮りアニメーション』/作品鑑賞『対話しながら作品を見てみよう』/現像体験『デジタルカメラの画像から白黒写真をプリントする』
上記の基本メニューを中心に、担当の先生と事前に相談をしながら、学校ごとに最適なプログラムを組み立てていきます。詳細は公式ホームページをごらんください。右上のQRコードからもアクセスできます。



リニール・オープン 総合開館20周年記念 「杉本博司 ロスト・ヒューマン」展 作家インタビュー



パラマウント・シアター、ニューヨーク 2015年 ゼラチン・シルバー・プリント ©Hiroshi Sugimoto/Courtesy of Gallery Koyanagi

リニール・オープンを飾る最初の展覧会は、ニューヨークを拠点に活躍する現代美術作家、杉本博司さんの最新作をご紹介します「杉本博司 ロスト・ヒューマン」展です。本展のコンセプトについて、出品作品の最終調整を行う杉本さんに、担当学芸員がお話を伺いました。

文明を謳歌している私たち その未来は？

文明が終わる33のシナリオ

丹羽学芸員（以下、N）当館のリニール・オープンと総合開館20周年を記念して、「杉本博司 ロスト・ヒューマン」展が開催されます。まず「ロスト・ヒューマン」というコンセプトについてお話いただけますか。

N) 文明の終わりをテーマにした33のインスタレーション<今日 世界は死んだ もしかすると昨日かもしれない>と、どのような内容になるのでしょうか。

杉本) アメリカに住んで40年以上経ち、人生も68年生きてみて考えているのが、第二次世界大戦など歴史の現場で、何が起こっていたんだろうか、ということ。歴史の教科書ではなく、その時どうだったのか、物を通して見てみたい、物が発する力を肌で感じたいと思うようになり、様々な物を集めるようになりました。その物が逆に照射してくるもので、かたちづくるのが、このインスタレーションです。「理想主義者」(比較宗教学者)、「宇宙物理学者」など33のシナリオがあり、私が選んだ作品と様々な物で構成されます。まじまじのなか、遊んでいるのか分からない物が入り混ざっています。同じテーマで2014年にパリのパレ・ド・トーキョーで展覧会を開催しました。今回はその東京バージョンです。パレ・ド・トーキョーの展示は基本的にフランスのものでまとめたんです。今回は東京展ですから、日本のものも含めて構成します。たとえば、世界の

リニール・オープン 総合開館20周年記念 「杉本博司 ロスト・ヒューマン」展

Hiroshi Sugimoto: Lost Human Genetic Archive

2F 3F 2016.9.3 | 土 | -11.13 | 日

一般1,000(800)円 / 学生800(640)円 / 中学生・65歳以上700(560)円

※()は20名以上の団体料金 ※小学生以下および障害者手帳をお持ちの方との介護者は無料 ※10月1日(土)部長の日は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料 □主催:公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館 □助成:公益財団法人朝日新聞文化財団 □協賛:東京都写真美術館 支援会員 ほか

終わり方としては、戦争関連のものですね。戦前に内閣情報部が出していた『寫眞週報』というすばらしい構成のグラフ雑誌があります。表紙ひとつみても洗練されたモダニズムといえていい出来です。しかし、戦争に国民を導く役割を担っていたという側面もある。つまり、ジャーナリズムが世界を壊すという「終わり方」も想定できる。ジャーナリズム関係では、もう少し時代がさかのぼった博文館発行の『日露戦争実記』があります。日露戦争は、日本が西欧文明に勝ったという高揚感があり、当時のジャーナリズムも盛り上がった。その後の歴史を考えると、ほんとうの意味では勝ったのか、負けたのか、様々な視点で観ることができます。

写真でしか見えないヴィジョン

N) 今回、<今日 世界は死んだ もしかすると昨日かもしれない>と、世界初公開となる「廃墟劇場」<仏の海>を合わせてひとつの展覧会にしようと考えられたのはなぜでしょうか。

杉本) この世が終わると日本人が真剣に思ったときがあって、それは平安時代の終わりでした。後白河法皇の時代ですね。仏法が廃れてしまい、世界が終わるんだとみんなが思っていた。それを末法思想というんですが、その思想の影響で、生きている間に極楽浄土をこの眼で見てみたいと、三十三間堂が構想されたわけです。仮想現実のパラダイスですね。それからいままですと人類は滅びずに来ているんですが、いま、本当に末法の世が来ているのかも知らない……。そこで、文明の終わりや廃墟になった劇場と合わせて「仏の海」を展示して、仏様の救いを展覧会が終わるといって形式を考えました。「廃墟劇場」はまさに、文明が終わってしまったかのようなイメージです。アメリカには、1920年代、30年代に建てら

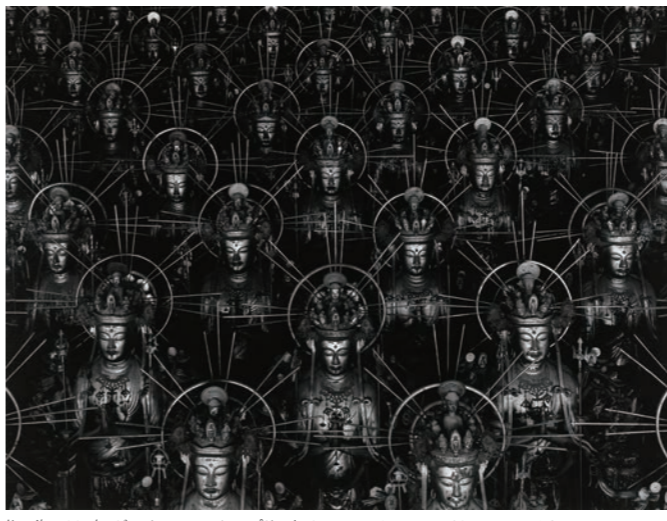
れた豪華な映画館がたくさんあるんですが、いま、あちこちで廃墟化しているんですよ。もう電気もきていないので、発電機を持ち込んで撮影しました。自分達でスクリーンを立て、持ち込んだプロジェクターで災害や天変地異、核戦争などを描いたディズアスター・ムービーを選んで上映し、映画一本分の長時間露光で撮影したものです。

N) 同じように映画館で撮影された「劇場」シリーズは杉本さんの代表作の一つで、とても有名な作品ですね。当館も收藏させていただいています。

杉本) 人間は映画上映の間、2時間近く瞬きしないで眼を開けていることはできません。長時間露光で時間そのものを写真に撮るとなると、人間の眼では見えなかったものがみえてくるということですね。人間の眼とカメラの構造はほとんど同じなんですけど、写真でしか見ることができないヴィジョンが、そこにはあるわけです。

N) <劇場>には、実はものすごい量の写真が映画館のスクリーンに写っているんだと、以前おっしゃっていましたね。映画1本で172,800枚の写真の残像がそこにあると。

杉本) そうですね。2時間の映画で172,800コマありますから。投影された写真が積み重なって、光にもどっていくイメージです。日本でも地方の過疎化が問題になっていきますけど、アメリカでも死に絶えている街がたくさんあって、そういう街のかつて豪華だった映画館は本当に朽ち果ててきている。シートが自然に溶けたように腐っている光景を見ていると、平安時代の平家滅亡のお話と同じで、諸行無常を感じざるを得ない。我々はいま、文明を謳歌しているわけですが、このままずっと続いていくのかどうか。これ



仏の海 1995年 ゼラチン・シルバー・プリント ©Hiroshi Sugimoto/Courtesy of Gallery Koyanagi

らの作品はいわゆるネガティブ・プレゼンテーションですが、みなさまに考えていただきたければ、と思っ

図面どおりにはつけれない

N) 杉本さんは骨董を蒐集されたり、しつらえたり、はまたた舞台芸術から建築、造園など、たいへん幅広い活動をなさっています。杉本さんの今後の活動についてお聞かせください。

杉本) 若い頃からいつか実現しようと思ったことをノートに書いてきました。いまは経済的な条件が許す限り、ノートに書いたことをやっているという状態ですね。忙しいですが、自分がやりたいことをやっているの、毎日が楽しい。ちなみに明日は庭師です。造園の過程で職人を作るんですよ。現場にいて手を土で汚しながら。建築でも、現場にはきれいな格好で指図するのではなく、自分で手を汚しながら建物をつくっていく。何事も図面どおりにはつくれません。たとえば、庭だったら石を探していくところから始める。すばらしい石をみつけてから、どこにどういふふうに置くかという全体計画が決まってきます。今回の展覧会でも『日露戦争実記』のようなモノが出てきた。じゃあ、どう見ようか、と考えるうちに展示内容が決まっていくんです。そんなふうにしてこれからも自分がやりたいことを楽しめるようにやっています。

(2016.4.19 インタビュー)

[PROFILE] 杉本博司(現代美術作家)



1948年、東京生まれ。1970年に渡米し、アート・センター・カレッジ・オブ・デザイン(L.A.)で写真を学び、1974年よりニューヨーク在住。明確なコンセプトに基づき、大型カメラで撮影された精緻な写真作品を制作し、国際的に高い評価を確立。2001年ハッセルブラッド国際写真賞、2009年高松宮殿下記念世界文化賞受賞。「歴史の歴史」展(カナダ、アメリカ、国立国際美術館、金沢21世紀美術館など、2003-2009)、ガラスの茶室「Glass Tea House Mondrian」(開島庵)「ヴェネツィア、2014」。「趣味と芸術-味占師」今昔三部作(千葉市美術館、2015)など多数。

杉本博司は当館の重点収集作家であり、(ジオラマ)〈劇場〉〈海景〉などの大型カメラを用いた精緻な写真表現や、〈フォトジェニック・ドローイング〉(放電場)など、写真の発明や科学研究に基づいた写真作品で写真のみならず、現代美術やデザイン界等で多大な影響を与え、近年では歴史をテーマにした論考に基づく展覧会や、建築作品を手がけるなど、多岐にわたる活動で注目をあつめています。本展覧会では、2014年パレ・ド・トーキョー(パリ)でおこなった展示の東京ヴァージョン<今日 世界は死んだ もしかすると昨日かもしれない>、世界初公開<廃墟劇場>、新インスタレーション<仏の海>の3シリーズを館内2フロアで展示し、作家の世界観、歴史観に迫ります。写真は時間と光による記録物であるということを変更してあげてくれるこれらの作品によって、私たちの意識は人類や文明の尺度による時間を超え、歴史という概念そのものへの考察へと導かれることとして、

最後の晩餐:サンディ(部分) 1999年 ゼラチン・シルバー・プリント ©Hiroshi Sugimoto/Courtesy of Gallery Koyanagi



開催予定の展覧会(2016.9-)

「世界報道写真展2016」 2016.9.3-10.23 / B1F



世界報道写真大賞 スポットニュースの部 単写真1位 ウォーレン・リチャードソン(オーストラリア) 2015年8月28日 レスケ(ハンガリー-南部) セルビアとハンガリーの国境を越えようとするシリア難民の男性と子ども。国境の有料検閲付きフェンスが、背景の暗闇に溶け込んでいく。ハンガリー側へ渡ろうとする難民の中にいた。

「世界報道写真展」は1955年にオランダのアムステルダムで、世界報道写真財団が発足したことにより、翌年から始まった展覧会です。昨年一年間に撮影された写真を対象にした「世界報道写真コンテスト」には、128の国と地域、5,775人のプロの写真家から、8万2,951点の応募がありました。本展では入賞作品約150点をご紹介します。

総合開館20周年記念 「東京・TOKYO 日本の新進作家vol.13」 2016.11.22-2017.1.29 / 2F



元田敬三 <<OPEN CITY>より 2012年

当館では、写真・映像の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、将来性のある作家を発掘し、新しい創造活動の場となるよう、様々な事業を展開しています。その中核となる「日本の新進作家展」は、今年で13回目を迎えます。本展覧会では、6人の新進作家、小島康敬、佐藤信太郎、田代一倫、中藤毅彦、野村恵子、元田敬三によって表現された「東京」をテーマにした作品をご紹介します。

総合開館20周年記念 「TOPコレクション 東京・TOKYO」 2016.11.22-2017.1.29 / 3F



本城直孝 (東京タワー 東京 日本 2005) (Small Planet)より 2005年

毎年多様な切り口とテーマで収蔵品を紹介する「TOPコレクション」展。総合開館20周年を記念する今回は「東京」をテーマに、「日本の新進作家vol.13」と同時開催します。「東京を表現、記録した国内外の写真作品を収集する」という当館の収集方針のもとに収蔵された珠玉のコレクションの中から、本城直孝、西野平、鷹野隆大、林ナツミ、ホンマタカシ、佐藤時啓、島山直哉ほか、現代作家の作品を中心に紹介します。

総合開館20周年記念 「アビチャップン・ウィーラセタクン 亡霊たち」 2016.12.13-2017.1.29 / B1F



上下とヒ、《Ashes》シダラツルガヤンネル・ヴィデオ 2012年

タイ出身で、映像作家、映画監督として世界的な活躍を展開するアビチャップン・ウィーラセタクン(1970-)は、タイの東北地方を舞台に、伝説や民話、個人的な記憶や夢などを題材とした、静謐かつ叙情的な映像作品で高い評価を受けてきました。国内の公立美術館初の個展となる本展では、移民や格差など、過去に紹介されること少なかった社会的側面にも焦点をあてた作品も紹介します。

支援会員 CORPORATE MEMBERS

東京都写真美術館の活動をご支援いただくため、次の企業・団体に支援会員としてご入会いただきました。

- (株)岩波書店 (株)久米設計 (株)NHKエデュケーショナル (株)NHKエンタープライズ (株)NHKグローバルメディアサービス (株)NHK出版 (株)NHKビジネスクリエイト (株)NHKメディアテクノロジー NTT都市開発(株) エブソン販売(株) エルメス財団 (株)Office Mam オリックス(株) オリオンバス (株)オンワードホールディングス(株) 花王(株) カシオ計算機(株) 鹿島建設(株) (株)KADOKAWA
- カトーレック(株) 神奈川新聞社 (株)キクチ科学研究所 キョコマン(株) (株)紀伊國屋書店 ガヤラリー小柳 共同印刷(株) (株)ADKアーツ (株)NHKアート NHK営業サービス(株) (株)NHKエデュケーショナル (株)NHKエンタープライズ (株)NHKグローバルメディアサービス (株)NHK出版 (株)NHKビジネスクリエイト (株)NHKメディアテクノロジー NTT都市開発(株) エブソン販売(株) エルメス財団 (株)Office Mam オリックス(株) オリオンバス (株)オンワードホールディングス(株) 花王(株) カシオ計算機(株) 鹿島建設(株) (株)KADOKAWA
- (株)ジェアール東日本企画 JSR(株) JXホールディングス(株) ジェイティービー印刷(株) (株)シグマ (株)実業之日本社 (株)ダイケングループ 大成建設(株) (株)大丸松坂屋百貨店 大和証券(株) (有)タカ・イシギャラリー (株)集英社 (株)主婦と生活社 (株)主婦の友社 (株)小学館 松竹(株) 信越化学工業(株) (株)新潮社 (株)スタジオアリス (株)スタジオエムジー (株)スタジオジブリ スターツ出版(株) (株)サンライズ (株)サンライズ
- 成美製版(株) 積水ハウス(株) ソニー(株) 損害保険ジャパン日本興亜(株) 第一生命保険(株) 第一法規(株) (株)ダイケングループ 高砂熱学工業(株) (株)高島屋 (株)宝島社 (株)竹中工務店 玉川大学芸術学部 (株)新湖社 (株)丹青社 千葉商科大学政策情報学部 (株)生活の友社 中外製薬(株) 帝人(株) (株)TBSテレビ デジタル・アド・バイジング・コンソーシアム(株) (株)テレビ朝日 (株)テレビ東京
- 電源開発(株) (株)電通 東亜建設工業(株) 東映(株) 東急建設(株) 東京海上日動火災保険(株) (株)東京スタデオ 東京造形大学 東京総合写真専門学校 東京工芸大学 東京新聞・中日新聞社 シャネル(株) (株)東宝(株) (株)東北新社 (株)東洋経済新報社 東洋熱工業(株) (株)トキワ
- (株)徳間書店 戸田建設(株) (株)トータルプランニング オフィス トヨタ自動車(株) (株)トロマンマネジメント (株)ニコンイメージングジャパン 日外アソシエーツ(株) 日油(株) 日活(株) (株)日経BP 日光ケミカルズ(株) 日産自動車(株) (株)日本カメラ(株) 日本空港ビルディング(株) 日本経済新聞社 (株)日本広告社 (公社)日本広告写真家協会 日本コルマー(株) (株)日本色材工業研究所 日本写真印刷(株) (株)写真家協会 (公社)日本写真協会 日本写真芸術専門学校 (一社)日本写真文化協会 日本大学芸術学部 日本たばこ産業(株)
- 富国生命保険(相) (株)ニッポン放送 日本ロレックス(株) (株)ニューアートメディアフェア (株)ニッセイ ノーリツ鋼機(株) (株)博報堂 DYMEDIA (株)バリエーション (株)文藝春秋 (株)ベネッセホールディングス (株)ハートマン(株) 北海道新聞社 (株)ホテルオークラ東京 (株)室内カラー (株)本田技研工業(株) 毎日新聞社 (株)マガジンハウス 丸善(株) (株)マンダム (株)みずほ銀行 (株)三井住友海上火災保険(株) 三井住友信託銀行(株) 三井倉庫ホールディングス(株) 三井不動産(株) (株)三越伊勢丹 三越恵比寿店 三菱製紙(株) 三菱倉庫(株) 三菱電機(株) 三菱UFJ信託銀行(株) (株)ミルボン (株)プラザクリエイト (株)プリンスホテル (株)フジテレビジョン (株)双葉社 (株)ブラザークリエイト (株)プリンスホテル (株)ベルボン (株)フレームマン (株)文化工房 (株)博報堂プロダクツ (株)バス・コミュニケーションズ (株)ハートマン(株) パナソニック(株) (株)パラゴン バリミキ (株)ビーエー (株)ピーエーメディア(株) 北海道写真の町東川町 東日本旅客鉄道(株) (株)日本色材工業研究所 (株)美術出版社 (株)日立物流 (株)ビックカメラ (株)ビデオプロモーション (株)ヒノキ新薬(株) (株)ピラミッドフィルム (株)ファーストリテイリング
- 三菱製紙(株) 三菱倉庫(株) 三菱電機(株) 三菱UFJ信託銀行(株) (株)ミルボン (株)プラザクリエイト (株)プリンスホテル (株)フジテレビジョン (株)双葉社 (株)ブラザークリエイト (株)プリンスホテル (株)ベルボン (株)フレームマン (株)文化工房 (株)博報堂プロダクツ (株)バス・コミュニケーションズ (株)ハートマン(株) パナソニック(株) (株)パラゴン バリミキ (株)ビーエー (株)ピーエーメディア(株) 北海道写真の町東川町 東日本旅客鉄道(株) (株)日本色材工業研究所 (株)美術出版社 (株)日立物流 (株)ビックカメラ (株)ビデオプロモーション (株)ヒノキ新薬(株) (株)ピラミッドフィルム (株)ファーストリテイリング (株)ロケット (株)ヨドバシカメラ (株)リョウメイシャ (株)リョウメイシャ (株)モンスター (株)良品計画 (株)ロボット (株)ワコウ・ワークス・オブ・アート (株)ワコル (株)ワッツ オプトキー



事業内容は予告なく変更される場合があります。最新情報は公式ホームページをご確認ください。

| 3F | 2F | 2016 | B1F | 1F |
|--|--|--|---|----|
| <p>リニューアル・オープン 総合開館20周年記念 杉本博司 ロスト・ヒューマン 9.3(土)-11.13(日)</p>  <p>左)パラマウント・シアター、ニューアーク 2015年 右)最後の晩餐：サンディ(部分) 1999年 ©Hiroshi Sugimoto/Courtesy of Gallery Koyanagi</p> | <p>総合開館20周年記念 東京・TOKYO 日本の新進作家 vol.13 11.22(火)-2017.1.29(日)</p>  <p>中藤毅彦 <STREET RAMBLER>より 2015年</p> | <p>9</p> <p>世界報道写真展2016 9.3(土)-10.23(日)</p>  <p>ウォーレン・リチャードソン(オーストラリア) 2015年8月28日 レスケ(ハンガリー南部)</p> | <p>1階のホールでは主に映画作品を 上映します。上映作品が決定次第、 ホームページで発表します。</p> | |
| <p>総合開館20周年記念 TOPコレクション 東京・TOKYO 11.22(火)-2017.1.29(日)</p>  <p>畠山直哉 《#066》〈Slow Glass/Tokyo〉より 2006年</p> | <p>総合開館20周年記念 東京・TOKYO 日本の新進作家 vol.13 11.22(火)-2017.1.29(日)</p>  <p>中藤毅彦 <STREET RAMBLER>より 2015年</p>  <p>佐藤信太郎 《2013年5月19日 台東区浅草》2013年</p> | <p>10</p> <p>写真新世紀 東京展 2016 10.29(土)-11.20(日)</p> <p>11</p> <p>上野彦馬賞 11.26(土)-12.4(日)</p> <p>12</p> <p>総合開館20周年記念 アピチャポン・ウィーラセタクン 亡霊たち 12.13(火)-2017.1.29(日)</p>  <p>《Ghost Teen》2009年</p> | <p>総合開館20周年記念事業 国際シンポジウム 「写真美術館はなぜ、必要か？」</p> <p>□2016.11.23(水・祝) □定員：190名 □場所：1Fホール</p> <p>日本における写真文化のセンター 的役割を果たすために、各国の写真 関係者を招聘し、キュレーター、研 究者との交流を通じて我が国の写 真文化の向上、普及を目指します。</p> | |
| <p>2</p> <p>総合開館20周年記念 第9回恵比寿映像祭 2017.2.10(金)-2.26(日)</p> | | | | |
| <p>総合開館20周年記念 夜明けまえ 知られざる日本写真開拓史 総集編(仮称) 2017.3.7(火)-5.7(日)</p>  <p>《松平忠礼の妻、豊子像》(山内家写場) 1875-1880年頃</p> | <p>総合開館20周年記念 山崎博(仮称) 2017.3.7(火)-5.10(水)</p>  <p>《山下洋輔2》、〈Early Works〉より 1969-1974年</p> | <p>3</p> <p>APAアワード2017 2017.3.4(土)-3.19(日)</p> | <p>総合開館20周年記念事業 初期写真 国際シンポジウム 「幕末」(仮称)</p> <p>□2017.3.26(日) □定員：190名 □場所：1Fホール</p> <p>「夜明けまえ 知られざる日本写真開 拓史 総集編(仮称)」開催にあわせて、 初期写真に関する国際シンポジウ ムを開催し、初期写真の意義を考察 します。</p> | |

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

2016年9月3日より開館いたします(9月2日まで休館中です)

2016年9月3日から 開館時間/10:00-18:00(木・金は20:00まで。ただし9月9日[金]と10日[土]は21:00)
休館日/毎週月曜日(月曜日が休日の場合は開館し、翌火曜日が休館)

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 Tel.03-3280-0099 topmuseum.jp

東京都写真美術館ニュース「アイズ16」87号 □発行日：2016年7月7日/企画・編集：東京都写真美術館事業企画課 普及係 □印刷・製本：株式会社公栄社 □発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館©2016 □本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製を禁じます。 ※本誌編集ページに掲載されている観覧料は、原則として消費税込みの価格です。